

Jun. 20 2007

JEKS (The Japan Electronic Keyboard Society)

# News Letter

No.4

## 日本電子キーボード学会ニュースレター ～日本電子キーボード学会「第3回全国大会」案内号～

### 目 次

1. 第3回全国大会概要	2
2. 大会スケジュール	3
3. 会員の声	
「スピーカーを通した生楽器と電子楽器、その彩りと響き」 個人正会員 坂 利美（電子オルガン教育家）	4
「電子オルガンを通して、よりソルフェージュの楽しさを」 学生会員 加藤祐香（国立音楽大学）	6
「電子オルガンに始まった、終わりのない学習」 学生会員 坂本恵子（昭和音楽大学）	7
4. 事務局からのお知らせ	
日本電子キーボード学会・平成18年度決算報告書	8
日本電子キーボード学会・会員状況	8
編集後記	8

\*事務局の住所、電話、ファックス番号が変わりました。

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1 昭和音楽大学内 阿方気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

E-mail : [jeks@snow.ocn.ne.jp](mailto:jeks@snow.ocn.ne.jp) H.P. : <http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/>

## 第3回全国大会概要

主催：日本電子キーボード学会第3回全国大会組織委員

とき：2007年10月7日（日） 10時半～18時

ところ：東京学芸大学（東京都小金井市貫井北町4-1-1）

- ① JR 中央線武蔵小金井駅北口下車、京王電鉄バス小平団地行（約10分）
- ② JR 中央線武蔵小金井駅北口より徒歩25分
- ③ JR 中央線国分寺駅北口より徒歩20分

参加費：学会員（正会員＝1,000円、学生会員＝500円）

一般（非学会員＝3,000円、学生＝1,500円）

\* 懇親会費も含む

問合せ：日本電子キーボード学会事務局

### 第3回全国大会の特長

第3回大会の特長のひとつは、3ページの大会スケジュールにあるように、パネルディスカッションを設けたことが挙げられます。これの目的は、大会が研究発表だけに終わらず、テーマに沿ったディスカッションで、より深化した掘り下げとより多くの人との情報交換を行わんとするところにあります。現在、テーマは電子オルガンおよびM.L.関連のものになる予定です。ここでいうM.L.とは、L.L.(Language Laboratory)から派生したMusic Laboratoryの略語で、親機と複数の子機による主として電子ピアノを使用した音楽教育への取り組み（教材やカリキュラムなど）に関連したものです。

同時に、研究発表は昨年の4つの部屋に分かれていたものを3つにしました。これは発表者の人数は減ることを意味しますが、各部屋にももう少し多くの参加者があってもいいのではないかと意見によるものです。研究発表をお考えの方は、締め切りが7月15日となっていますが、お早めに仮題とともにお申込みください。

### 基調講演

基調講演者の三澤洋史氏は、電子オルガンをを用いたオペラなどの劇場作品において、その黎明期から積極的に電子オルガンの使用を行ってきた方です。タイトルは、“電子オルガンによる、オペラ、ミュージカルなど劇場音楽上演の実践と将来について”となっており、今までの数多くの経験を活かして、オペラ上演におけるメリットと問題点、さらに将来への展望を語っていただける予定です。大編成のオーケストラの代用であることを超えた、さらなる音のパレットの可能性はどこまで目指せるのか？ 電子オルガンならではの魅力はどこにあるのか？ という方向性のもとで電子オルガンの可能性に迫ります。

## スケジュール

(2007年6月20日現在)

10:00	受付 (芸術館ロビー)		
10:30	芸術館		
	あいさつ 学芸大学関係者 吉田泰輔 (学会代表)		
10:45	基調講演 三澤洋史 (第二国立劇場指揮者) 「電子オルガンによる、オペラ、ミュージカルなど 劇場音楽上演の実践と将来について」(仮題)		
11:15	総会		
12:00	《昼食》		
13:00	パネルディスカッション		
	Room - 1	Room - 2	Room - 3
	パネル - 1 電子オルガン関連	パネル - 2 M.L.関連(大会特長参照)	
14:30	《休憩》		
15:00	研究発表 - ①	研究発表 - ④	研究発表 - ⑦
15:30	研究発表 - ②	研究発表 - ⑤	研究発表 - ⑧
16:00	研究発表 - ③	研究発表 - ⑥	研究発表 - ⑨
16:30	《休憩》		
17:00	芸術館		
	研究コンサート 東京学芸大学 (中地クラス) ほか		
18:00	創立 20 周年記念飯島会館		
	懇親会		

Room-1 = 芸術スポーツ事務棟 3F 第1音楽講義室

Room-2 = 芸術スポーツ事務棟 3F 音楽技能第1教室

Room-3 = 芸術スポーツ事務棟 4F 第2音楽講義室

## 会員便り

### 「スピーカーを通した生楽器と電子楽器、その彩りと響き」

正会員 坂 利美

帝国劇場で「風と共に去りぬ」を観た時のことです。舞台から聞こえてくるオープニングの音楽のその響きを、この音は一体、エレクトーン何台で出しているのでしょうか？と思いました。随分正確なリズムでした。伸びやかなヴァイオリンのメロディーの向こうから、打楽器は実に自然にダイナミクスを伴って近づいて来ます。どうしたらこんな演奏に仕上がるのかしら？とうとうここまでエレクトーンも来たのだわ、素晴らしいバランスだわ、とも思いました。

「ねえ、ここはエレクトーンで演奏をしているのね？」そう連れに問うた。

「まさかあー、エレクトーンじゃないでしょう。オーケストラでしょ！」との返事が返ってきた。

「でも、生楽器だったら、こう言う風には聞こえて来ない筈よ。両脇のスピーカーから聞こえているのよ。」

「でも、ここにはエレクトーンは無い筈です。」

「どうして？ だって、エレクトーンの音がしているわよ！」私は、小声の積りでしたけれど、そう叫んでいました。

休憩時間に、舞台下の、オーケストラピットを覗きに行き、愕然となりました。そこで目に入ったのは、生楽器のヴァイオリンを持ち、襟にマイクが付けられた人の姿で、その他の生楽器 10人ほどのプロムナードオーケストラだったからです。

なぜ、生の楽器なのにマイクを通すの？それでは意味が無いじゃないの、と思いました。が、暫く考える内に、この人数では大人数で束ねてフォルテを出せるだけの音量が得られないから、マイクを通してスピーカーから出さざるを得ないのだ。そういう言う事をようやく理解したのでした。

つまり、私にとっては、舞台において、マイクを通したスピーカーから出て来る一方向からの束ねられた音は、オーケストラの音とは認知されておらず、「電子楽器」と言う反応をするのだと、その時に判りました。

そこには舞台両脇のスピーカーから客席に向かい、ストレートに伝わる音しか無く、生楽器の音群が空間を走り、絡まりあうオーケストレーションの魅力と言うものは皆無でした。これをオーケストラだと言われても、私にとっての喜び；即ち、様々な音が舞台のあちこちから立体として発生し、空間を縦横に濃淡にと重なりあいながら走り、そして消え、再び現れては次の楽句へと重なり繋がれて、また消えて行く。それを幾度と無く繰り返すに任せていると、いつの間にか、気付けば異空間へと誘ってくれている。そんなことを楽しめるオーケストラの響きは、得られなかったのですから。

エレクトーンのリジストレーションの様に、それぞれの音色が、濃淡と共に混ざり合うことなく独立、林立し、ある直線の向こう側から順次にやって来て、順次に耳に入り来る音の群。

そこに楽器を持った人を発見しなければきっと、生楽器を鳴らしている、とは最後まで思わなかったでしょう。それほどの高性能を、今のエレクトーンは持っているのだもの、と思っておりました。

そして、この連れとの遣り取りに因り、人は既に、「マイクを通したオーケストラ」の音にすっかり耳慣れしており、オーケストラピットで生楽器を演奏している人達が居るにも関わらず、音楽が何故、空間を伝い走って、シャワーを浴びるように私達の傍らに届いて来てはくれないのか？という疑問さえ持たない現実があることも、理解したのでした。

それはその筈です。私達は、いつでもホールで生のオーケストラの演奏を楽しんでいる訳では無く、TVでの中継や録画による演奏会、映画館ではスクリーンや客席の脇のスピーカーから流れる音楽を聴き、そして何よりCDやMD、DVD等に録音された生楽器演奏の再生音を、生楽器として認識する事に何の違和感を持たず、自然な事として受け入れるオーディオ・ヴィジュアル機器と共に暮らしている現実があるからでしょう。

ピアノの音もまた、マイクを通してスピーカーから流されてしまえば、生のピアノに良く似た電気音になります。人の声も、肉声では無くなります。

当たり前過ぎるこの現実に興議を唱える人はいないでしょう。

生の音と、電気音の区別を認知はするが、その違いに違和感をもたらされないものであるならば、本体の音量を更にスピーカーによって拡大された電子楽器の音楽が、舞台から客席に一方向的に届けられる方法もまた、なんら不自然な事ではありません。

音楽をホール、野外等で味わう時であれ、A・V機器から得る時であれ、ネット配信されることにより楽器本体のスピーカーから得る時であれ、音は空間を伝い広がり、情報となり、ある種の楽しさ、愉しみ、歓喜をもたらします。

そこで、生楽器か、電子楽器の音であるかの違いを問う意味は無く、人が望む音色の美しさや、ピッチの心地良さ、ハーモニーやリズムのバランスが、アンサンブルとしてどのような音の膨らみ方や立体感を伴って、私達の耳に、身体に届いて来ているのかと言う、多様な要素が重要になります。そして、それ等がどのように組み合わせられている時、人それぞれの好みや心地良さを充たす事になるのだろうかとの問い、音楽を伝える側の根源的な問いを充たす答えを求めて、新しい可能性を深く広く尋ねる中に、意味も意義もありましょう。

2001年2月24日にオペラ「カルメン」を江東区文化センター（ホール）で鑑賞しました。

舞台上に置かれた2台編成のエレクトーン演奏により、リズム群のダイナミックな仕上がりの上に、鮮やかな音色で、メロディーが浮き立つように序曲が始まりました時、後部客席から

「エレクトーンは大したものになったなあ、本物のフルートを聴いているようだ！」の声が漏れ聞こえました。

その半年後の8月9日、「風と共に去りぬ」の開幕でタラのテーマを聴きながら、～このヴァイオリン音色の、高きに良く保たれたピッチ、あのスネアらしきリズムの奥行、ハーモニーは控え目なのにこの深み、この遠近感と高低音幅の広がり、どんなレジストと楽器位置でなら可能なのかしら？今度は一体、何台のELを使っているの？～ 私はそう自らに問い掛けていたのでした。

#### 会員便りの原稿募集

第1号に協賛団体会員より投稿をいただいた。今回は個人正会員1名と学生会員2名の投稿を載せた。活字はホームページの会員情報とは違った良さがある。積極的な投稿をお願いしたい。

## 「電子オルガンを通して、よりソルフェージュの楽しさを」

学生会員 加藤祐香（国立音楽大学）

私には、今後やっていきたいことが2つあります。1つ目は、オペラなどの電子オルガン伴奏です。高校生のとき、何気ないきっかけで声楽のピアノ伴奏をする ことになり、大学4年生になった今もまだ続けています。普段はソロで弾く機会が多いので、人と合わせることができ、とてもいい勉強になります。ただ、電子オルガンで伴奏するにはレジストを作らなければならず、今まで中々ピアノのように簡単には合わせができずにいましたが、今まで伴奏をしてきたおかげで人脈ができ、電子オルガンでオペラ伴奏の勉強ができるようになりました。電子オルガンコースのアンサンブルの授業で先生にみていただくかとも思いましたが、それぞれ授業があり中々その時間に集まることができず自分たちだけでの活動になっているのが現状です。今は、卒業後に仕事ができるよう経験を積んでいるところです。

2つ目は、電子オルガンを使用してのソルフェージュ指導です。私は今、総合電子オルガンコースの他に作曲理論コースに入っています。それは、大学に入ってからソルフェージュの楽しさと大切さを改めて知り、音楽の基礎を固め、クラシックを電子オルガンに編曲するときや、演奏をする際に生かしたいと思ったからです。

このコースでは、和声・フーガ・アナリーゼを中心に勉強しています。和声では、バスにどの転回形を持ってくるかで和音の響きが全く違ってきますし、いかに綺麗なメロディーを作るかによっても印象が大分変わります。電子オルガンを始めたばかりの頃に弾いていた曲は、バスを足で弾き、密集和音を左手で弾くというものが多く、ピアノにしても、開離和音を弾くということはありませんでした。和声を始めてから、開離和音の広がりのある響きを改めて実感しました。

それに、今までは主唱・答唱くらいしか気にして弾いていなかったフーガも、実際自分で書いてみると知らなかったことが多く、フーガを書くのに大変な労力があることを痛感しました。ですが、そのおかげでバッハの作品がどれだけ精密に書かれているかを少しずつですが理解できるようになってきています。

これらをしっかり学ぶことは、ソルフェージュ課題を書く上でとても役に立つと思います。私はソルフェージュが好きなのですが、まず私のような人に会うことはありません。受験のために仕方なくっていたという感じで、大概の人は苦手意識があるようです。聴音では、ピアノの音を書き取ることが多く、他の楽器の聴音になると、慣れないせいか途端にできなくなったりします。

授業で規制のCDの音源を用いて聴音をしたことがあります。テンポが一定ではないのでとても書き取りづらかったのを覚えています。聴音のためにいろんな楽器と演奏者を連れてくるのは時間的にも金銭的にも難しいですが、電子オルガンを使えば、弦楽器や管楽器の聴音も容易にすることができるようになりますし、一定のテンポで弾くことも可能です。

また、初見演奏するときにも電子オルガンは有効だと思います。オーケストラ曲をピアノ連弾で弾くのではなく、電子オルガンで数人で演奏し音色を設定することでオーケストレーションの勉強になりますし、移調楽器を読むことで移調の練習も同時にできます。

実際の場合では私が想像しているようにはいかないことが多いと思いますが、もっとソルフェージュを楽しみと思える人が増えるように日々邁進していきたいと思っています。

## 「電子オルガンに始まった、終わりのない学習」

学生会員 坂本恵子（昭和音楽大学）

学生会員の立場からの意見を…と原稿依頼を受けました。専門的な知識ありませんが、常々思っていることを連ねてみます。

電子オルガン。これほど便利で活用の幅が広い楽器もそう無いのでは、と感じます。アコースティック楽器と同様に、ソロ、伴奏、アンサンブルとして活用できるのはもちろん、電子オルガンならではの多彩なリズム、音色、効果音を用いて、既成の楽譜にとらわれない自由な音楽を作り出すことができます。

しかし、その一方で音色やリズムのデータ作成に手間がかかる、また、機種によって操作方法が異なるといった難点があります。メーカー間で仕様が異なるのは当然のことながら、同一メーカーであってもモデルチェンジによって大幅に仕様変更されるのも度々で、毎度、新機種に慣れるまで多くのエネルギーを要します（もっとも、音質の向上や機能の充実など、改良されている点が歴然とわかるので苦勞よりも喜びが大きいのですが）。電子オルガンは現在進行形で改良を続けており、新機種の操作習得をしなければならないのは常ですが、私はそれと同時に様々なモデル・種類のキーボードに対応できる総合的な演奏力をつけることを目指しています。

私は実家のある北海道のキリスト教会で10年程前から伴奏を務めていましたが、この教会にある設備はグランドピアノ、チャーチオルガン（フルート音源中心、足鍵盤つき）、シンセサイザー、ドラム、ベース、ギターでした。ピアノでバンドと共に150人の会衆の歌伴奏、冠婚葬祭ではオルガン1台で厳かな伴奏、ゴスペルクワイヤ用にシンセサイザーで伴奏作り…等、充実した奉仕活動をしてきましたが、もう少し自分に技術やセンスがあったらと思うこともしばしばありました。即興で伴奏を頼まれた時にはシンセサイザーで音色を選ぶ時間も無いために大抵は生ピアノに向かいますが、「電子楽器ならこのような音色で、こうアレンジして弾けるのに」とイメージが浮かぶだけに、歯がゆいことも多くありました。せめて使い慣れている自宅の電子オルガンが教会にあれば、もう少し効果的な伴奏ができただろうと思います。

電子オルガンは100%どこの会場にでも備えられているわけではなく、仮に備えられていても、ひと昔、ふた昔前の機種であるというのが現状です。そのような状況で効果的な伴奏をしたいと考えるなら、どんなキーボードにも対応できる演奏力をつけることが必要だろうと思います（それができればもはや一流ですが）。簡単なようですが、例えば同じ電子オルガンであっても機種が違うといったら音色を選ぶという単純な操作にさえ戸惑い、シンセサイザーとなれば更に操作が煩雑な上、オルガン特有の足鍵盤がないためにベースとなる音をどうカバーするかも課題となり、伴奏形の変更も必要となります。

また、アコースティックピアノとなれば、伴奏形の変更に加えて、電子オルガンのような持続音を発しないことから、ピアノにふさわしい別の表現方法が求められるでしょう。私の目標までの道のりは遠いですが、伴奏法の研究、音色作り、アレンジ、理論の強化…と山積みの課題を一步ずつクリアしていきこうと奮闘中です。これらはそれぞれ別個ではなく一連のものであり、このような要素を総合的に扱う面白さがあるから、私は電子オルガンが一番好きなのだと思いません。電子オルガンに始まり、勉強のすそ野を広げて、改めて電子オルガンに活かす、という自分の理想に向かって今後も果てしなく学習が続く予定です。

## 日本電子キーボード学会・平成18年度決算報告

(平成18年4月1日～平成19年3月31日)

科 目	金 額		
収入の部			
	繰越金		175,186
	会費収入	個人会費	355,000
		学生会費	7,500
		団体会費	120,000
		賛助会費	290,000
	参加料収入	大会参加料	73,000
	事業収入	講習会受講料	0
	受取利息	銀行利子	198
	預り金	前受会費	365,000
収入計			1,385,884
支出の部			
	通信費		205,420
	会議費		32,095
	事務用消耗品費		3,099
	印刷費		268,170
	会場費		0
	制作費		0
	大会経費		277,233
	振込手数料		10,800
	その他		0
支出計			796,817
収 支			589,067

### 平成18年度会員状況 (会費納入実績に基づく)

	2008年度	2007年度	増 減
個人正会員	71	61	10
学生会員	3	3	0
団体会員	4	5	-1
賛助会員	5	6	-1
会員総数	83	75	8

#### 編集後記

第3回大会号をお届けします。詳細はホームページの次回全国大会をご覧ください。ようやく大会概要がみえてきました。新入会員および大会参加者の増加が今後の課題といえます。(阿方)